素描

素描の「たからもの」

フリーランスアナウンサー　今尾ひな子

私は写真を撮られるのが苦手です。どうやら、言葉でのコミュニケーションと違って、レンズとの一瞬の対話が不得意らしく、置き去りにされるのですね。しかし、写真が必要となる機会も少なくありません。そんな時は可能なかぎりとっておきの、たからもの「私の分身」で代用しています。

じつは、若い頃にラジオの仕事がご縁で、洋画家の矢橋六郎画伯にデッサンを描いていただきました。大きな作品を見た瞬間、「わぁ、これってまさに、私だー」と大きな叫び声。

それまで意識したことも、見たこともなかった私が引っ張りだされてそこにいる。初めての対面に驚いて、まずは本業の声が無言で反応したのでしょうか？

勝気でトンガリ、よくいえば頑張り屋さん。以来、私の分身です。

先生は美術学校を卒業後、パリに4年間留学されていました。その後、ヨーロッパを旅行中だったある日のこと。「ローマの友人が背の高い、とびきり美人のモデルを連れてきた。喜び勇んで絵筆を持ったのにどうにも描けなくて、とうとう投げ出してしまった。整い過ぎていて、できあがっていて面白くない。女の子を描くなら何かいいものを引き出してあげたいから、美人でない方が、描きがいがある。それからは、美人を描くのはやめました」

訳が分かれば納得。苦手なレンズとは別の世界がそこにはありました。半日ほどお邪魔した、アトリエでのコミュニケーションから引っ張り出していただいたのです。30年以上が経過してもまったく色褪せることのない、私だけの「たからもの」です。